

Title	広島大学図書館蔵『さくらかひ』の紹介：未刊連歌百韻の翻刻
Sub Title	
Author	川崎, 美穂(Kawasaki, Mion) 川上, 一(Kawakami, Hajime)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	三田國文 No.66 (2021. 12) ,p.81- 104
JaLC DOI	10.14991/002.20211200-0081
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20211200-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

広島大学図書館蔵『さくらかひ』の紹介

——未刊連歌「百韻」の翻刻——

川崎 美穂
川上 一

はじめに

広島大学図書館蔵『さくらかひ』は、室町中期から江戸初期成立の百韻を収めた連歌集である。上下二冊。以下の百韻十二種を所収する（作品ごとに通し番号を付した）。

上冊

- 【1】 天文九年四月二十五日梅宗牧両吟朝何百韻「またて聞」
- 【2】 天文六年七月二十日何木百韻「色ことに」*存十一句
- 【3】 天文六年七月二十二日何人百韻「鹿啼て」
- 【4】 享徳二年二月七日何人百韻「待花に」
- 【5】 永正十三年三月十花千句第三何路百韻「行月も」
- 【6】 天文十四年二月二十五日何人百韻「花の色も」
- 【7】 延徳二年九月夢想百韻「住吉の」

下冊

- 【8】 延宝四年六月後水尾院独吟百韻「扇はや」
- 【9】 寛正六年三月六日何人百韻「遠く来て」

【10】 享禄二年九月二十九日和漢聯句百韻「秋はいさ」

【11】 元和八年七月四日白何百韻「つたへくめ」

【12】 永禄六年十二月十四日何木百韻「年ことの」

本書は奥書によれば、文化十年（一八一三）閏十一月、正周なる人物が下関赤間で中野喜一郎所持の連歌懐紙三巻を一覧・書写したものである（「三巻」が十二種のうちの箇所を示すかは不明）。『連歌総目録』（明治書院、一九九七年）に著録なく、従来の研究で利用された形跡は僅少である。収録百韻の多くは既知の作品であるが、現状未翻刻のもの（2・3・4・8・9・11）、また本書のみにみえる孤本も存在しており（2・4・9）、連歌史上に重要な写本であることに疑いはない。

本稿では『さくらかひ』の書誌的事項を示すとともに、収録百韻の紹介を行い、未刊のものについては全文を翻刻した。なお、『さくらかひ』は文化年間の写本であり、本文には少なからぬ誤脱が認められ、必ずしも善本とは言い難い憾みがある。

未翻刻百韻のうち孤本でないものに関しては、善本と認められる伝本を底本として翻刻した。翻刻は川崎・川上が分担して行い、解題は【1・3・4・5・6・7・9】を川上が、【2・8・10・11・12】を川崎が執筆した。

一、書誌

『さくらかひ』（広島大学図書館・大国五七三）
 文化十年（一八一三）閏十一月 正周写 二冊
 目録書名「さくらかひ」。袋綴二冊。原装格子刷毛目表紙（上下冊共二三・二種×一六・三種）。左肩題簽「さくらかひ 上（・下）」（一五・一種×三・一種）。上冊には「上」の横に「宗祇」と鉛筆書。各冊扉（一丁表）に目録がある（後掲）。下冊見返し裏に「一 靈元法皇御連誦／二／四 就隆公御発句之連誦（玄仲自筆／懷紙写之）／五 紹巴独吟百韻（自筆／之写）／三 享祿二年雲上和漢百韻」とあり。料紙は楮紙。虫損間々あり。每半葉一四行、連歌一句一行書。書写奥書「文化十年壬十一月赤間関／遊学の折から中野喜一郎／所持の懷紙三巻一覽之随而／燈下にて書写わきかたければ／後にてもかきあらたむるへ／けれ／正周筆」（二四丁表）。墨付丁数上冊二七丁・下冊二四丁。字高は百韻ごとに一定せず、およそ一三・〇種×一九・〇種。なお、伊知地鐵男昭和十年（一九三五）写『刈藻の露抄』（早稲田大学図書館伊知地鐵男文庫・文庫二〇・一五）に本書の抄出がある（抄出箇所は本書でいう【4・9】の百韻二種）。

○目録 *実際の内容と相違するものあり

上冊

- 【1】 またてきく声や人伝ほと、きす
近衛直家（マ）公宗牧（マ）両吟連歌百韻
色ことにみしや朝さむ萩の露
宗碩発句永閑興行連歌一折
- 【2】 鹿啼て花に露そふまかきかな
近衛直家（マ）御発句永閑興行同百韻
待花にまつさし出るわかはかな
法守発句 享徳二年二月四日
- 【3】 行月もいさよふはなの雲路かな
玄清発句 天文十九年八月廿八日
花の色も鳥の音おしむ夕哉
宗牧氏康（マ）両吟連歌百韻
- 【4】 住吉の松こそ道のしるへなれ
夢想 宗祇在判写
- 【5】 下冊
- 【6】 扇はや来る秋風のやとり哉
靈元法皇御独吟御連歌百韻
- 【7】 遠く来てみるかひあれや花さかり
桐。発句
- 【8】 秋はいさくれんともなき紅葉かな
雲上和漢 享祿二年
- 【9】 つたへくめむかしを今の菊の水
就隆公御発句玄仲其外諸連中
- 【10】
- 【11】

1ウ

1オ

【12】 年毎の花ならぬ世をうらみかな

紹巴百韻永祿六年

1才

二、略解題

『さくらかひ』所収の百韻十二種の略解題を掲げる。名称は百韻の内容をもって定め、発句の初五文字を示した。本稿で翻刻するものについては「*本稿で翻刻」と付した。

【1】 天文九年四月二十五日梅宗牧両吟

朝何百韻「またて聞」 (2才)

目録題「近衛直家公宗牧両吟連歌百韻」。賦物「朝何」(賦物)。天文九年(一五四〇)四月二十五日張行の近衛種家(連歌字・梅)・宗牧による両吟百韻(各五十句)。「梅宗牧両吟朝何百韻」とも。発句は種家「またて聞こゑや人伝時鳥」、脇句は宗牧「初卯花のたそかれの月」。伝本には、宗牧の自注本(種家の跋によると佐野藤九郎の求めによるもの)と無注本があり、本書は後者。自注本系の宮内庁書陵部桂宮蔵本『連歌注』(三五三・五五)所収本が、桂宮本叢書『連歌I』に翻刻。

【2】 天文六年七月二十日何木百韻「色」ことに (6才)

*本稿で翻刻

目録題「宗碩発句永閑興行連歌一折。賦物「何木」。天文六年七月二十日に、宗碩一門を中心に張行された百韻連歌。発句以降十一句残欠本。発句は宗碩「色」ことにみしや朝さむ萩の

露」。脇句は房滋「月はあり明の秋風の庭」。宗碩(天文二年没)生前の発句による興行であろう。連衆は宗碩・房滋・周桂・長継・宗牧・印政・宗階・貞次・寿慶の総勢七名。当該百韻の二日後には【3】「鹿なきて」が張行されており、連衆が重なる。興行主の永閑は、宗碩門の連歌師で、永正から天文年間に能登と京都の実隆邸との往復を中心に旺盛な活動事蹟がある。本百韻は『さくらかひ』のみにみえる孤本であり(宗碩の発句は『大発句帳』秋部・萩(四五〇八)にみえる)、十一句の零本ではあるが、向後の完本発見を期して、全文を翻刻した。

【3】 天文六年七月二十二日何人百韻「鹿啼て」 (7才)

*本稿で翻刻

目録題「近衛直家公御発句永閑興行同百韻」。端作「永閑興行」。天文六年七月二十二日張行。発句は種家「鹿啼て花も露そふまかきかな」、脇句は永閑「山は外面の月のゆふかけ」。賦物は『さくらかひ』に記載ないが、他本によれば「何人」。種家(発句のみ)・永閑・宗牧・周桂・堯景(後の里村昌休)・寿慶・宗龍の総勢七名による。句上あり。伝本は本書のほか天理図書館綿屋文庫蔵『連歌(自延徳十二至天文廿三)』(れ四・二二五)所収本のみ。その他、早稲田大学図書館伊地知鐵男文庫蔵『宗牧連聚』(文庫二〇・一〇六)に宗牧句の抄出がある。本稿では書写年の遡る天理図書館蔵本を底本に、早稲田大学図書館蔵本を校合本として全文を翻刻した。

【4】 享徳二年二月七日何人百韻「待花に」 (11才)

*本稿で翻刻

目録題「法守発句 享徳二年二月四日」^(七)。賦物「何人」。端作に「享徳二年二月七日 砌公真跡」とあり、目録記載の日付と齟齬するが、端作を優先し「七日」とする。発句は法守「待花にまつさし出るわか葉かな」、脇句は宗砌「春日かくれの露の下草」。連衆は、法守・宗砌・忍誓・行助・救信・盛舎・超心・順諭・直清・量阿・久重・宗保・圭順の総勢十三名。宗砌主催の興行とらしい。『連歌総目録』に記載なく、伝本も確認した限り『さくらかひ』のみであるため、全文を翻刻した。端作の「砌公真跡」を信用すれば宗砌筆懐紙からの転写本である。

【5】 永正十三年三月十花千句第三

何路百韻「行月も」 (15才)

目録題「玄清発句 天文十九年八月廿八日」、端作にも「天文十九年八月廿八日」とあるが誤りで、実は十花千句の第三百韻である。賦物「何路」。十花千句は永正十三年(一五一六)三月十一日から十四日にかけての千句連歌。近江国人中江員継を願主に宗碩の草庵で張行された。第三百韻は十二日の興行で、発句は玄清「行月もいさよふ花の雲路かな」、脇句は永閑「さくらにあかす夜の山越」。連衆は、聴雪(三条西実隆)・牡丹花(肖柏)・玄清・宗哲・永閑・真宗・宗仲・員継・寿慶・宗牧の総勢十名。伝本は千句全体で二十本を超え、このうち国立国

会図書館蔵『連歌合集 三十二』(WA一六・九四・三〇) 所収本が、上野さち子『十花千句(永正十三年) 翻刻と解題』(『山口女子短期大学研究報告』26、一九七二年三月)に翻刻、大方家蔵本が、小林健二編『連歌資料集—大方家所蔵—』(清文堂、一九九一年)に影印・翻刻される。また、宗碩問書系(第一種)、橋本公夏系(第二種)の二種の古注があり、第二種に属する太田武夫蔵本が金子金治郎『連歌古注釈の研究』(角川書店、一九七四年)に翻刻。

【6】 天文十四年二月二十五日宗牧独吟

何人百韻「花の色も」 (19才)

目録題に「宗牧氏康^(北巻)両吟連歌百韻」とあるが、氏康は脇句を下したのみで、他は宗牧の独吟である。賦物「何人」。発句「花の色も鳥の音おしむ夕哉」(宗牧)、脇句「霞にもる、小屋の外の山」(氏康)。百韻成立の経緯は『東国紀行』に詳しく、小田原の氏康邸に招かれた宗牧が、当座に前述発句を詠んだところ、これをもって一折の独吟を請われたので、それならば脇句を、と氏康に所望したのだという。宗牧は後に百韻を完成させたらしい。伝本は多いが、本書と国立公文書館蔵『賜蘆拾葉』所収本のほか、脇句作者を氏康と明示するものはない。この中には、古注釈三種も含まれるが(『さくらかひ』は無注本)、これらが宗牧自注であるかの判断は慎重を期すべきであろう。古注のうち第一種の書陵部桂宮本『連歌注』(三五三・五五)所収本が桂宮本叢書『連歌I』にて翻刻。第二種の大東

急記念文庫蔵本『何人百韻注』(四一―三〇―三一―一七)が大東急記念文庫善本叢刊『連歌Ⅱ』(中古・中世篇⁹)に影印収録。

【7】延徳二年九月夢想百韻「住吉の」(23才)

目録題「夢想宗祇在判写」。端作「夢想」。本奥書「延徳二年九月 宗祇在判」。宗祇の独吟百韻。発句は夢想「住吉の松こそ道のしるへなれ」、脇句「遠里小野の雪の帰るさ」。百韻の前に序文があり、それによると、発句は延徳元年(二四八九)冬の朝に宗祇が得た夢想の句で、その場で下句(脇句)を付けたまま置いていたものを、翌二年九月になって百韻にした、との由である。伝本は独立したものが複数伝わるほか、宗祇発句集『宇良葉』(孤本)の末尾にも所収。このうち江藤保定『宗祇の研究』(風間書房、一九六七年)に、東京大学国文学研究室蔵本が翻刻。『宇良葉』の翻刻として深井一郎「宗祇連歌発句集 宇良葉」(『金沢大学教育学部紀要』8、一九六〇年)、貴重古典籍叢刊『宗祇句集』(角川書店、一九七七年)がある。また近年、伊藤伸江・奥田勲・櫻井本『夢想之連歌』(注(一)付翻刻)(愛知県立大学日本文化学部論集11、二〇二〇年三月)以降の連載で、翻刻・訳注が行われている。

【8】延宝四年六月後水尾院独吟百韻「扇はや」(2才)

*本稿で翻刻

目録題に「靈元法皇御独吟御連歌百韻」とあるが、延宝四年(二六七六)六月の後水尾院の独吟百韻。三十五句に猪苗代兼

寿の批語(多くは「珍重奉存候」)がある。発句は「扇はやこぬ秋風のやとり哉」、脇句「短夜おしき閨の月かけ」。兼寿は仙台藩お抱えの連歌師。京都の公家とも親しく、近衛家に入入りしたほか、仙洞昇殿をゆるされ、後水尾院の文壇にも参加していた。⁴本百韻の伝本には、『さくらかひ』の他、広島大学図書館福井文庫蔵本「御所方御連歌」(国文五〇一八・N七二)所収本、富山市立図書館山田孝雄文庫蔵本『連歌集』(W九一・二・レ・五〇五八)所収本、大阪天満宮蔵『枕の夢』(れ五・四)⁵等があるが、現状翻刻は存しない。福井文庫蔵本には兼寿の批語がなく、『さくらかひ』も81句と100句の批語が脱落するほか誤写も多いため、山田孝雄文庫蔵本を底本に全文を翻刻した。

【9】寛正六年三月六日何人百韻「遠く来て」(8才)

*本稿で翻刻

目録題は「桐 発句」。賦物「何人」。寛正六年(一四六五)三月六日、足利義政大原野花見の折の百韻。発句は義政(連歌字・桐)「遠く来てみるかひあれや花さかり」、脇句は二条持通(連歌字・藤)「桜かり路のけふは幾春」。連衆は、桐(義政)・藤(持通)・聖(聖護院道興)・三(三宝院義賢)・一(一条兼良)・実(実相院増運)・飛鳥井中納言(雅親)・生観(京極持清)・宗全(山名持豊)・日野大納言(勝光)・権大輔(唐橋在治)・能阿・専順・宗元・福元朝臣(勝川)・貞親朝臣(伊勢)・義直(親度)・行助・賢盛(杉原)の総勢二十名。挙句を欠く(全九十九句)。本興行は、発句が『親元日記』・『蔭涼軒日録』に記録され、同

四日の花頂山花見の折の義政発句「咲満ちて花より外の色もなし」とともに著名であるが、百韻全体となると『さくらかひ』のほか伝本を聞かない（『連歌総目録』にも未載⁷⁾）。室町殿の連歌を把握する上で重要な資料であるため、本稿で全文を翻刻した。なお、このうち義政の付句については、義政の句集『愚句』に「寛正六年三月 六日大原野花下会」として、前句と共に抄出されている。『さくらかひ』本文の誤脱を補いうる箇所が少なくないので校異として示した。

【10】 享禄二年九月二十九日和漢聯句百韻「秋はいさ」（12才）

目録題「雲上 和漢 享禄二年」。享禄二年九月二十九日に後奈良院（一四九六―一五五七）周辺の公家と五山僧により張行された和漢聯句御会。発句は三条西実隆「秋はいさくれんともなき紅葉哉」、脇句は伏見宮貞敦親王「霧開山上欄」。連衆は入道前内大臣（実隆）、中務卿宮（伏見宮貞敦親王）、「欠名」（後奈良天皇）、月舟（寿慶）、帥大納言（公条）、鷲尾前中納言（隆康）、万里小路中納言（秀房）、新中納言（庭田重親）、^{如月}寿印、^{高倉}範久朝臣、中院中納言（通胤）、^{三条西}実世の総勢十二名。伝本は、国立国会図書館蔵『連歌合集 三十』所収本、東北大学狩野文庫蔵本（四・一〇九六二一・一）、叡山文庫蔵『和漢漢和』（下四）所収本の三本が知られる。国立国会図書館本を底本に『室町前期和漢聯句作品集成』（臨川書店、二〇〇八年）に翻刻（他二本で校異）。

【11】 元和八年七月四日白何百韻「つたへくめ」（16才）

*本稿で翻刻

目録題「就隆公御発句玄仲其外諸連中」。賦物「白何」。元和八年（一六二二）七月四日に毛利家内で張行された千句連歌の第八百韻。発句は就隆「伝へくめ昔をいまの菊の水」、脇句は浄喜「紅葉のかけにひらく谷の戸」。連衆は、就隆（発句のみ）・浄喜・玄仲・安松・正純・良音・純重・信良・就次・元吉・及佐・忠祐・元与・了佐・源音の総勢十五名。就隆は毛利輝元の次男で初代徳山藩主。里村玄仲はこの時期毛利家の連歌宗匠。『さくらかひ』所収本は、下冊の剥離した見返し裏に「就隆公御発句之連歌 玄仲自筆懷紙写之」とあり、玄仲自筆懷紙の転写本の由である。この原本とみられる懷紙は、現在慶應義塾図書館に蔵されている（渡辺金造（刀水）旧蔵書、次頁図版）。金銀泥の下絵に清書された装飾懷紙で、同時期の毛利家興行の清書懷紙の様態と酷似しており、玄仲の清書懷紙と看做してよい（後掲書誌参照）。冒頭には「横地氏珍藏記」の印記が見られ、横地石太郎の旧蔵であったことが知られる。おそらくは、横地が山口高等学校・山口高等商業学校の教授（高等商業学校では校長も）を勤めていた明治三十年代頃に同地で入手したものであろう。その後、陸軍中将渡辺金造のもとを経て、慶應義塾に収蔵されたものと思われる。本懷紙が「さくらかひ」の奥書にみえる「中野喜一郎所持の懷紙三卷」の一である可能性は高く、江戸期における所在が把握されることとなる。『連歌総目録』に記載なく、未紹介の資料であるため、清書懷紙を底本に全文を翻刻した。

慶應義塾図書館蔵
上…端作・初折表
下…句上・名残折裏

目録題「紹巴百韻永祿六年」。室町時代末期の連歌師里村紹巴の独吟による「称名院追善千句」の第一百韻。永祿六年（一五六三）十二月十四日から十八日の五日間に亘り、称名院（三条西公条）の追善として張行された。発句は「年ことの花ならぬ世のうらみかな」。脇句は「ふりにし跡も庭の春草」。伝本は多数で、国立国会図書館蔵『連歌合集 四』所収本、名古屋大学皇学館文庫本（九一・一・一・Sa）など五十二本が知られる。広く流布し、自注・聞書等の古注も存在するが、『さくらかひ』は無注本である。このうち自注本系の広島大学蔵本が、金子金治郎『連歌古注釈の研究』（角川書店、一九七四年）に翻刻。素丹聞書系の京都大学附属図書館本（四一・二四・シ・二貴）が、『京都大学貴重連歌資料集 第六卷』（臨川書店、二〇〇二年）に影印・翻刻。

注

- (1) 他本「雲路」を「雲間」とする。
- (2) なお国立公文書館本も宗牧・氏康の「両吟」とする。
- (3) 『さくらかひ』上冊最末尾にあたる。上冊の題簽にある「宗蔵」との鉛筆書きは、これを全体の奥書と取り違えたものであろう。
- (4) 兼寿の事蹟は、綿技豊昭『近世前期猪苗代家の研究』（新典社、一九九八年）に詳しい。兼寿と後水尾院の交流については、田中隆裕「後水尾院の連歌活動について―江戸初期宮廷連歌の動向―」（『連歌研究の展開』勉誠社、一九八〇年）に詳しい。
- (5) 未調査。当該百韻については、前掲注(4)の田中氏の論において「法皇は専ら兼寿を好み、御会には（近衛）基熙に殊更に兼寿を召

し連れる仰せを出している。延宝四年六月八一歳の法皇の独吟連歌「扇はやこぬあき風のやどり哉」に兼寿の点が付いたものがある（枕の夢・大阪天満宮蔵）と言及される。

(6) 『陰涼軒日録』では「花さかり」を「サクラ花」とする。

(7) 本百韻の存在自体は、伊地知鐵男『後鑑』所引の『御連歌集』について―柿衛文庫蔵の室町殿御発句』『伊地知鐵男著作集Ⅱ（連歌・連歌史）』（汲古書院、一九九六年〔初出…一九六六年〕）に示されている。

(8) 『連歌大観』第一巻に飛鳥井雅親の句集として収録されるが、義政の句集である。川上―『足利義政文芸資料考―家集および連歌資料について』（三田國文65、二〇二〇年）参照。

(9) 本千句の他の百韻は現状確認されない。

(10) 『連歌卷子本集 二』（新天理図書館善本叢書32、八木書店、二〇二一年）、尾崎千佳氏解題参照。

(11) 前掲注10所収の「賦山何連歌百韻（慶長二十年三月吉日）」のほか、同解題で示される玄仲一座の毛利家連歌懐紙を参照。

三、翻刻

《翻刻作品一覧》

【2】 天文六年七月二十日何木百韻「色ごと」に

底本 『さくらかひ』（上冊）

【3】 天文六年七月二十二日何人百韻「鹿啼て」

底本 天理図書館蔵『連歌（自延徳十二至天文廿三）』

【4】 享徳二年二月七日何人百韻「待花に」

底本 『さくらかひ』（上冊）

【8】 延宝四年六月後水尾院独吟百韻「扇はや」

底本 富山市立図書館蔵山田孝雄文庫『連歌集』

【9】 寛正六年三月六日何人百韻「遠く来て」

底本 『さくらかひ』（下冊）

【11】 元和八年七月四日白何百韻「つたへくめ」

底本 慶應義塾図書館蔵『賦白何連歌』

《凡例》

一、広島大学図書館蔵『さくらかひ』所収の百韻連歌のうち、翻刻の存しないものに限り、全文を紹介する。

一、百韻の翻刻は、『さくらかひ』収録の順に行い、各冒頭に表題を付した。

一、百韻のうち『さくらかひ』のほか善本の存在する場合は、底本を差し替えている。底本は各冒頭に示した。

一、対校本の存する作品については、各項の末尾に校異を示した。仮名遣いは底本のままとし、異同は示していない。校

合に利用した連歌書の底本と略号は各冒頭に示した。

- 一、漢字の正字・異体字については、「歌・哥・譌」のように、使い分けがなされる場合のあるものを除き、全て現在通用の字体に改めた。

- 一、翻刻に際しては各百韻一句一行書きとし、百韻ごとに句頭に通し番号を付した。

- 一、改頁の箇所は「』」を付し、丁数・表裏を示した。

- 一、虫損により文字が欠損しているものは□で示した。

- 一、誤脱が想定される箇所は、(ママ)と傍記し、内容が推定できるものについては「某カ」のように示した。

- 一、ミセケチは、二重取り消し線に傍記の形で示し、重書きは訂正後の文字を本行、訂正前の文字を(×)にて傍記した。補入については行内に収め、特に示していない。

【2】 天文六年七月二十日何木百韻「色ことに」*存十一句
底本 『さくらかひ』(上册)

天文六年七月廿日

永閑興行

何木

- | | | |
|----|----------------|------------------------|
| 1 | 色ことにみしや朝さむ萩の露 | 宗硯 <small>(頤カ)</small> |
| 2 | 月はあり明の秋風の庭 | 房滋 |
| 3 | うつ夜半のいくから衣雁啼て | 周桂 |
| 4 | 行末おもふ旅のはるけさ | 長経 <small>(縁カ)</small> |
| 5 | 雲かゝる山路の跡や暮ぬらん | 宗牧 |
| 6 | しくれのふもと日はさゆるなり | 印政 |
| 7 | ちる木葉空に残らぬ冬はきて | 宗階 |
| 8 | ふきそふあらし閑いかならん | 貞次 |
| 9 | 海士小舟こき馴ぬるもしら波に | 寿慶 |
| 10 | かもめむれあるはなれその陰 | 正俊 |
| 11 | こと、ふも稀なる方の浦さひて | 宗利 |

(以下欠、十一行分空白)

6ウ

6オ

【3】 天文六年七月二十二日何人百韻「鹿啼て」

底 本 天理図書館綿屋文庫『連歌（自延徳十二至天文廿三）』
 （れ四・二二二五）

対校本 早稲田大学図書館伊地知鐵男文庫『宗牧連聚』（文庫
 二〇・一〇六）*抄出・・・（早）

*底本書誌（「江戸時代前期」写。袋綴横本一冊。原装茶色
 無地表紙（一三・五糎×二〇・三糎）。外題「連歌（自延
 徳十二／至天文廿三）」（左肩打付書、後補）。表紙がはが
 れており、見返し裏に朱筆の目録がある（本文と別筆）。
 楮紙、微虫損。墨付丁数六三丁。「延徳元年十二月廿六日
 薄何」以下十六種の百韻集成。本百韻は十三番目（48才）。

天文六年七月廿二日

何人

- | | | |
|---|-----------------|----|
| 1 | 鹿なきて花に露そふまかき哉 | 梅 |
| 2 | やまは外面の月の夕かけ | 永閑 |
| 3 | 音ちかき水や夜寒をさそふらん | 寿慶 |
| 4 | とけあへすしも又こほり行 | 周桂 |
| 5 | うちかすむ袖のあは雪しろき野に | 宗牧 |
| 6 | 春のあらしのいつちすくらん | 堯景 |
| 7 | 朝鳥の声もむら／＼遠さかり | 永閑 |
| 8 | 木すゑわかすもなれる関の戸 | 寿慶 |
| 9 | かへるさを待ともたれか道の空 | 周桂 |

48才

- | | | |
|----|------------------|----|
| 10 | ひとりくれゆく船かすかなり | 宗牧 |
| 11 | けふる江の波にたえ／＼月みえて | 堯景 |
| 12 | ひ、きも秋のかねのあはれさ | 永閑 |
| 13 | 袖の露とこの霜よのかたしきに | 寿慶 |
| 14 | おもひにえやはたへむ蓬生 | 周桂 |
| 15 | わかれしにたのむもはかな身の行ゑ | 宗牧 |
| 16 | つねならん世をたかうへにせん | 堯景 |
| 17 | 黒髪のいつれも雪にうち侘て | 永閑 |
| 18 | 山のかけなく冬はなりにき | 寿慶 |
| 19 | なつみ川なみにかつさく花かたみ | 周桂 |
| 20 | むすふ汀の春のふる寺 | 宗牧 |
| 21 | はしとほき月やあかつきかすむらん | 寿慶 |
| 22 | なひくやなきに残るさよかせ | 永閑 |
| 23 | 影きゆるほたるにまかふ露ちりて | 堯景 |
| 24 | うた、なみたのつ、まれぬ袖 | 周桂 |
| 25 | 憂身ともうらみやおもひわかさらん | 宗牧 |
| 26 | ありふりくれと人はみましや | 寿慶 |
| 27 | あすもとはなにたのみけむ老の末 | 永閑 |
| 28 | おこたりきつる文のくやしき | 宗牧 |
| 29 | いひやるもしらぬ都となしはてぬ | 周桂 |
| 30 | ゆかりもともものつらきさすらへ | 永閑 |
| 31 | わかれつるかりなく秋のうらなみに | 寿慶 |
| 32 | 霧間のやまのをちの横雲 | 堯景 |
| 33 | 下紅葉うつろふ月を又やみん | 宗牧 |
| 34 | かさしのきくの匂ふ面かけ | 周桂 |

48ウ

35 やま人のすみかを君かみきりにて 永閑
 36 よしの、みやはいつのふるあと 寿慶
 37 みつの江やこゝろなくやは舟とめん 周桂
 38 たゝまくをしの夕なみのこゑ 宗牧
 39 すゝしさにあかてもふかす夏衣 永閑
 40 夢ち過ぬるむら雨のそら 寿慶
 41 呉竹のかせの末葉のそよぐ夜に 堯景
 42 たそかれ時そならはすもうし 周桂
 43 もれしより人めの関を中にして 宗牧
 44 こゝろのみちは行かひそなき 永閑
 45 おもひわひてかたるや花の漧ならん 寿慶
 46 かすみにけりなあし引の山 周桂
 47 鶯にかすくゝとりのこゑそひて 堯景
 48 あさ居せましや夜半のしのゝめ 宗牧
 49 敷たへのさてしもうとくすむ月に 永閑
 50 うちのまする萩の葉のをと 寿慶
 51 なをさりの露のかことはきえねた、 宗牧
 52 行ゑやそでの色にいてなん 堯景
 53 ほとくのかきりあるへきくらゐにて 周桂
 54 わか身におはぬみちはのそまし 永閑
 55 けふことの爪木にかゝるかりの庵 寿慶
 56 時雨あられにかへる山かけ 宗牧
 57 さらに又冬かと思ふ春さえて 永閑
 58 こちふく風そ空をわきたる 周桂
 59 梅かゝのかた枝ほのめく朝またき 堯景

49
オ

60 袖しろたへにふかき夜の月 寿慶
 61 露もこそふれしまくらのかたみなれ 周桂
 62 人のこゝろの秋のかなしき 永閑
 63 ことの葉のたねとやなれる思ひ草 宗牧
 64 よしやまくすのかけてうらみむ 寿慶
 65 ふせやをもあはれふたくひなからめや 周桂
 66 遠こちくれてあまのともし火 宗牧
 67 浦風のなこりなきたる波の上 永閑
 68 雪のしづくやはらふかりかね 堯景
 69 旅にしてこゑまほしきはかへる山 寿慶
 70 あたなる雲も行かたはあり 周桂
 71 逢みしやたか世の夢に明ぬらん 宗牧
 72 かたからましをのちの夕くれ 寿慶
 73 うちゆるふひまもとめつる真木の戸に 周桂
 74 こゝろくらへもまくるみたれ碁 永閑
 75 しのふらん人の昔をとひ侘て 宗牧
 76 なみたをそふるあさちふのかけ 寿慶
 77 つれくゝと雲井のあとをもちる花に 永閑
 78 雨ほのかなるありあけの春 宗牧
 79 灯のかけつくす夜は長閑にて 堯景
 80 まれにしあへはねふりたになし 宗龍
 81 一つのまにうつゝの夢とまかふらん 寿慶
 82 かゝみをもてしたふたらちね 宗牧
 83 後の世のつみをすくふは仏にて 永閑
 84 かねのみたけのたえぬおこなひ 周桂

50
オ

50
ウ

- 85 身をしらは入日の露にふくあらし 宗牧
 86 あり明の月にのこるあさかほ 永閑
 87 たちまじる袖のけしきも秋の庭 周桂
 88 いかなる舟のありてうかへる 寿慶
 89 心ある人もふりにしなにはかた 宗牧
 90 三ともいはし夢の行すゑ 周桂
 91 時鳥かけするほとこのゑならて 寿慶
 92 山もわかれすくれふかき空 堯景
 93 そことなく嶺こす雲にふみまよひ 永閑
 94 風のかけたる花のうきはし 宗牧
 95 水のあはのうたかたのまの春にして 周桂
 96 かへすや秋のたのみなるらん 永閑
 97 しむる野の一村かすむかけさひし 堯景
 98 たれはかりゆく道のへのすゑ 寿慶
 99 惜むともしらてや月の入ぬらん 周桂
 100 夜もなからぬいと竹のこゑ 宗龍

梅一句

- 永閑廿一
 寿慶廿一
 周桂廿二
 宗牧廿一
 堯景十三
 宗龍一

┌

51ウ

51オ

【校異】
 〔本文〕 42 たそかれ時そ―たそかれ時と（早） 81 う
 つ、の夢と―うつ、の夢の（早） 85 ふくあらし―ふけ嵐
 （早）

【4】 享徳二年二月七日何人百韻「待花に」

底本 『くくらかひ』（上冊）

享徳二年二月七日 砌公真跡

何人

- 1 待花にまつさし出るわか葉かな
- 2 春日かくれの露の下草
- 3 谷風の深雪吹とく音冴て
- 4 水そ氷のひまをもとむる
- 5 霞より野沢に落る天つ雁
- 6 絶く残る小田の通ひ路
- 7 行秋の霜夜の月はけさ晴て
- 8 木々のもみちぞ立乱れたる
- 9 啼鹿の声さへ寒き山風に
- 10 夢さめにけりあかつきの床
- 11 明日のみちおもふ枕にかねきゝて
- 12 難波の入江舟そしつけき
- 13 下萌のほとは芦刈人もなし
- 14 かすむしほやは何をたくらん
- 15 春なれや曇り勝なる胸の月
- 16 あはてふる世の涙露けき
- 17 とはれめやまたし中く雨の暮
- 18 道さへ雲のうつむ山里
- 19 陰ふかき外面の樗花咲て

法守 宗朝 忍誓 行助 救信 盛舎 超心 順諭 直清 量阿 久重 宗保 砌 誓 助 守 砌 清 信

11オ

- 20 北野にちらす幣の追風
- 21 手向をは神もうけひけ麻の袖
- 22 出なんたひをいのるゆく末
- 23 唐国も赴く舟も君かため
- 24 こゝろつくしの恋路ともしれ
- 25 待空に木間もりくる月をみて
- 26 うき身にしむる宿の秋風
- 27 たゆむなよ思ふあたりに打衣
- 28 くるゝ野原はすゑもかはらす
- 29 跡かすむ山を幾らか越つらん
- 30 波そ花なる春のしまく
- 31 松うふる池の汀の藤咲て
- 32 ねもむらさきに見ゆる浮草
- 33 啼鳥やおのか心をくたくらん
- 34 したふ別そ千々もかなしき
- 35 金をもたつは朽せぬちきりにて
- 36 えやはわすれてふかき言の葉
- 37 枯木には飢たる猿ぞ叫なる
- 38 むなしき色にくるゝ冬山
- 39 年の末もとの春にや帰らまし
- 40 尽ぬとも無身をそいはゝむ
- 41 此時にあへる命のかひありて
- 42 まれの御幸の日こそおしけれ
- 43 まてや人花見所の夕月夜
- 44 おほろけにてはおらし桜木

誓 舎 主順 助 砌 誓 阿 守 信 法 誓 助 砌 心 信 守 阿 誓 砌 誓

11ウ

12オ

95 山深く入て此身をかへさはや
 96 いさ事とはんたれ松の門
 97 秋の風ひとりや月にこたへまし
 98 きりの小舟の通ふ梶音
 99 一葉ちる柳か下や水の面
 100 岸田のいねのほに出るとき

心 信 舍 誓 守 砌
 『

14ウ

【8】延宝四年六月後水尾院独吟百韻「扇はや」

底本 富山市立図書館蔵山田孝雄文庫『連歌集』（W九一
 一・二・レ・五〇五八）
 対校本 広島大学図書館蔵福井久蔵文庫『御所方御連歌』（国
 文五〇一八・N七二）・（福）

* 底本書誌〔江戸時代前期〕写。袋綴横本一冊。浅葱
 色亀甲文様表紙（一五・〇糶×二一・四糶）。外題
 「連歌集」（左肩題簽、後補）。原題簽剥離痕あり。每
 半葉十四行前後。墨付丁数四〇丁。「蝶鳥や遊びをむ
 すふ葉桜」以下、一八種の百韻集成。本百韻は十番目
 （三九才）。

法皇御獨吟

- 1 扇はやこぬ秋風のやとり哉
 はや御てにをは殊勝奉存候
- 2 短夜おしき閨の月かけ
 一声に行ほと、きすしたはれて
 珍重奉存候
- 3
- 4 たれこそとはね夕くれの雨
- 5 末なひくあさちましの篠原に
- 6 おちくさわくるとりくの袖
- 7 帰るさも駒をならふる思ふとち
- 8 もと見し栖たすねよる道

『

39才

- 9 朽はてぬ丸はしつたふ岩隠
たれ待かほに紅葉色こき
- 10 吹笛の音も澄のほる月更て
珍重奉存候
- 11 おくなつかしき柴の戸の秋
残りぬる空たきもの、菊の香に
しはしこてふのすかる叢
うら、なる日かけに霜は解尽し
かすみの袖に人もそふ道
珍重奉存候
- 12 散別みしとや花を折かさし
珍重奉存候
- 13 春のなごりを思ふ山ふみ
珍重奉存候
- 14 けふそへにくれぬと告るかねなりて
命待まのなけきいつまで
珍重奉存候
- 15 あたし身にあふにしかへはよしやた、
つらきふしたに忘れぬ中
折へくもこはなよ竹の心しれ
珍重奉存候
- 16 雪よりしらむ窓の明ほの
珍重奉存候
- 17 灯も取あへすして見る文に
頓のたよりをきく遠つ国

- 27 又あはむ事も定ぬうきならひ
老か行ゑをいはふけふの賀
別而珍重奉存候
- 28 物の音も調かへたることさらに
おろしはしめてよそふ池舟
葆そひし軒はの梢月清み
しくる、露はた、一とをり
珍重奉存候
- 29 かりくらす秋去衣恨あれや
めぐらしあかぬ盃の友
旅行をいつかはとのみくりことに
珍重奉存候
- 30 なみたかちにもよむ和歌
さきた、しをくれしとこそ契つれ
珍重奉存候
- 31 またれて花の跡とふはうし
別而珍重奉存候
- 32 谷水に散うく梅のなかれ出
珍重奉存候
- 33 己か羽風もうくひすやなく
みよしのやあれまいくいとふ古郷に
音信たえし此世すて人
心さしひとしからすは何かせむ
珍重奉存候

44 とひとはる、や月のともなひ
45 鈴虫のふりはへて聞蓬生に

46 あとをと、むる露のふか沓
47 明過るたかしの、めの道ならむ

珍重奉存候

48 なみたにくれてたとる行末
49 所さへそことしもなき故途に

珍重奉存候

50 おもひた、むもうき須磨の波
51 はるくと心つくしの舟の上

別而珍重奉存候

52 松風す、しかけは有明
53 すたれ捲向の山は秋ちかみ

54 とりのなく音もき、しらぬのみ
55 かしこきは何につけてもうらやまれ

56 のほくらあはためしなき迄
57 時めくはかたへのそねみあさからて

58 あつしさもそふはてくとはうし
59 たまくと折るしるしや見えさらむ

60 こよひは月に雲もかゝらす
61 雁もきぬ半の秋のくれ待て

珍重奉存候

62 つねにをしかの通ふ山陰
63 早苗さへ霜の後迄刈のこし

珍重奉存候

64 みたれそめぬる掬わひしも
65 色好むもとつ心をおさめかね

珍重奉存候

66 もはらよはよをあかず兼言
67 終に身はかけてかはらし契しれ

68 いつはりおほき人は何せむ
69 おりたちてこひしかなしも耳馴て

珍重奉存候

70 たのむかひたにあれな一筆
71 またきよりさかはいひし花の宿

珍重奉存候

72 柳にのこるまりの夕景
73 春雨はかすむ計にそゝき捨

珍重奉存候

74 しはしまたれていつる月代

珍重奉存候

75 道とをく麓を行は冷しみ
76 海みやらるゝ秋の白波

77 爰かしこ下居てあさるたつならん
78 もくつかきつめ人かへる跡

79 とし過る神楽の里の神さひて
80 今朝までね覚とふさよ風

81 あすはなをのこらし花を思へた、
82 春をとちむるかね響声

珍重奉存候

41オ

41ウ

珍重奉存候

僻墨卅五句

此内長四

法橋

兼寿

42ウ

83 暁を写して霞くみそへむ
行もとまるもうき関をくり

84 趣くはかきり有ける司にて

85 やり水すめる舎りをそ向

86 暮ふかく風に乱てとふ螢

87 そよそのことくなき物おもひ

88 大方にかそへあくへき恨かは

珍重奉存候

89 はちをきよめむ後の世をこそ

珍重奉存候

90 つかふるも今一きはの親の跡

別而珍重奉存候

91 あらはす才の猶のさかしさ

92 白玉のなかさへとをすをのつから

93 すゝきにおもる秋の夕露

珍重奉存候

94 野へに咲萩は手毎に折とりて

95 なこり尽せぬ月の下道

96 又いつといひなくさめよ此別

珍重奉存候

97 さた過し身の猶もたのみむ

98 うき沈みあるをこそ世の常ならめ

古ぎにかへる百敷もかな

珍重奉存候

42オ

【校異】

〔端作〕 法皇御独吟―延宝四年／（福）

〔本文〕 23 こはなよ―こよなよ（福） 39 散うく梅の―散行

梅の（福） 46 露のふか沓―露の沓（福） 47 たかしの、め

の―□るにかしの、め（福） 53 向の山は―向の山の（福）

56 のほるくらゐは―のほる位も（福） 58 あつしさも―あ

やしさも（福） 59 たまくも―たれくも（福） 78 人か

くる跡―人かへる跡（福） 86 舎りをそ向―舎りをそ問（福）

98 猶もたのみむ―すゑもたのみむ（福）

〔批語〕 1～100 ナシ（福）

〔卷末〕 「珍重奉―兼寿」―ナシ（福）

【9】 寛正六年三月六日何人百韻「遠く来て」

底本『さくらかひ』（下冊）

対校本『愚句』（『連歌大観』第一卷所収）・・・（愚）

*校異に『連歌大観』の句番号を付した

何人

- 1 遠く来てみるかひあれや花さかり
- 2 桜かり路のけふは幾春
- 3 山越て雉子鳴たつ朝霞
- 4 雲間を帰る雁の声く
- 5 漕連て波長閑なる沖つ舟
- 6 釣する蟹のいとまなきころ
- 7 月になる夜はすからになかめつ、
- 8 あかつきふけは寒き秋風
- 9 片敷の袖に露霜置そひて
- 10 打もたゆまぬ麻のさころも
- 11 山賤も慰あるかしはのいほ
- 12 折待得たるみねのすみかま
- 13 暮るまで榎きる斧の音はして
- 14 川そひ遠く人かへるなり
- 15 舟呼ふ淀のわたりの雨の日に
- 16 しけるあやめは引やのこさん
- 17 時鳥いつくの里もまたるへし
- 18 空ゆく月の明安きころ

- 桐
- 藤
- 聖
- 三
- 一
- 実
- 飛鳥井前中納言
- 生観
- 宗全
- 日野大納言
- 権大輔
- 能阿
- 専順
- 宗元
- 勝元朝臣
- 貞親朝臣
- 義直
- 親度

8オ

- 19 横雲の絶まに山のあらはれて
- 20 なひくや木々にあらしふくらん
- 21 時雨する末野の原の散もみち
- 22 もろき涙は露よりもうし
- 23 秋をこそ身に侘つるに老のきて
- 24 かゝるね覚にいと、長夜
- 25 枕よりよそに声せよ蜚
- 26 うら枯さひし蓬生の宿
- 27 故郷と思ふにあらぬ軒あれて
- 28 日数へにけり旅の帰るさ
- 29 露分しうつの山邊の雪の比
- 30 夕立寒くみゆるふしのね
- 31 水無月の望より後は秋の風
- 32 御祓の袖は波にほされず
- 33 里人の衣をしのに打はへて
- 34 糸薄こそ乱れかちなれ
- 35 藤袴随ひ渡るのへの露
- 36 すそをこめたる山の夕きり
- 37 棹鹿も妻待月の遅き夜に
- 38 ひとり心をなとつくすらん
- 39 せめて名の共に立かし片思ひ
- 40 語らひ捨し言のはそうき
- 41 契つる其折くも過はて、
- 42 三月を後と暮て行春
- 43 吹風にうつろふ花そ小塩山

- 行助
- 賢盛
- 桐
- 日野
- 一
- 藤
- 専順
- 権輔
- 生観
- 実
- 桐
- 専順
- 飛鳥井
- 宗元
- 能阿
- 聖
- 桐
- 賢盛
- 一
- 能阿
- 桐
- 生観
- 桐

8ウ

9オ

44 日は長岡の松に残れり
 45 苗代の田つらにきはふ民ありて
 46 まかする水そ末ゆたかなる
 47 池浪やせはき岩根を伝ふらん
 48 あらはれ見えぬ鳩の通路
 49 こもりつゝ、うき栖をは誰かしの
 50 霧の奥なる秋の山里
 51 友となる笹の月や更ぬらん
 52 星かあらぬか菊の一本
 53 花ちれば霜をいたゝく草の原
 54 とはしと思ふ身こそふりたれ
 55 我ちきり頼れぬ世に住もうし
 56 数書水か袖にあまれる
 57 誠なる法はかくして結ふ手に
 58 あらはす教道をたつねん
 59 人は来ぬ庭の白露ふみ分て
 60 真砂にあまる鶴のもろ声
 61 吹上の浜風通ふ若の浦
 62 入江の松の年経たる陰
 63 浪高くみとりの空やうつららん
 64 しはくも見る秋のよの月
 65 露の間の夢に馴るゝは儂しや
 66 人のおもかけ花の朝顔
 67 分ゆけはおらて過うき女郎花
 68 あれたる宿も心とまれり

専順 飛鳥井
 権輔
 一
 親度
 行動
 桐
 日野
 藤
 生観
 専順
 観
 能阿
 飛鳥井
 行動
 桐
 実
 一
 能阿

9ウ

69 禁には枕夕の山嵐
 70 はつせのかねの打霞む声
 71 開にけり桧原はくれの遅さくら
 72 是もかさしにおらん藤か枝
 73 紫の袖は数多の雲の上
 74 心たかまのゆへをととははや
 75 思ふ事つもる計に恋の山
 76 床なるちりはいつか払はん
 77 涙をは外にもらして忍ふ身に
 78 つらき程をも人やしらまし
 79 とまるへき舎に迷ふ旅の暮
 80 風に任するけふの舟道
 81 ほに出る汀の芦の打なひき
 82 なにはの事も秋は一しほ
 83 影みてる月こそ月の盛なれ
 84 心の花は色も分れす
 85 薄くこく軒はの梅の咲初て
 86 春の砌の雪のむらさきえ
 87 遣水の氷をくたく鳥の跡
 88 嶋を分たるたて石そある
 89 埋木の橋をは苔の又継て
 90 絶たる道をおこす此時
 91 諸人も君の恵に家そ富
 92 めくるも久し千世の春秋
 93 小車のふるき行幸の跡ありて

能阿
 生観
 桐
 一
 権輔
 専順
 義直
 義直
 聖
 生観
 賢盛
 親度
 義直
 藤
 生観
 行動
 桐
 一
 専順
 三
 能阿
 三
 桐
 宗元

10ウ

11オ

- 94 出る鷹場や大原の山 宗全
 95 鈴付て鳥驚す花のかけ 日野
 96 榊の枝そわかさはさしそふ 賢盛
 97 神風ホメやホメる通ふ宮所 桐
 98 伊勢のつかるも同じすま入 (空白)
 99 道遠し何国の国に至るらん (空白)
 100 峯に (以下欠) (以下六行分空白) 11ウ

【校異】

- 21 末野の原の―すゑ野のはらに (愚・三八二) 35 随ひ渡
 る―ほころひわたる (愚・三八六) 41 其折くも―そのお
 りくくの (愚・三八八) 71 桧原はくれの―桧原かくれの
 (愚・三九八) 85 咲初て―さきそひて (愚・四〇〇)
 90 (桐)―(義政付句) (愚・四〇二) 91 君の恵に―君のめ
 くみの (愚・四〇三) 97 ホメる通ふ―うららにかよふ (愚・
 四〇六)

【11】 元和八年七月四日白何百韻「つたへくめ」

底本 慶應義塾図書館蔵『賦白何連歌』(二八・X九三・二)

*底本書誌 (江戸時代初期) 写。連歌清書懷紙四折を長帳綴・一冊。後装小豆色亀甲繫ぎ表紙(一八・四糎×三六・七糎)。「賦白河連歌」(左肩題簽四辺双界、後補)。鳥の子紙金銀泥下絵連歌懷紙。一紙の法量一八・二糎前後×五三・五糎前後。字高一五・四糎(作者名含)。印記「横地氏／珍蔵記」(朱陽方、端作左下)、「刀水／書屋」(朱陽方、句上げ左下)、他一顆(朱陽方、初折オ右下)。

元和八年七月四日

第八

賦白何連歌

- 1 伝へくめ昔をいまの菊の水 就隆
 2 紅葉のかけにひらく谷の戸 淨喜
 3 明る夜や尾上の鹿のおしむらん 玄仲
 4 分行のへの月のをち方 安松
 5 袖の露散すてけりな草枕 正純
 6 吹いてつ、も風さゆる也 良音
 7 むら鳥やねくらの竹にさはくらん 純重
 8 舟さしよする岸のかたはら 信良
 9 塩はた、苦屋を近みみちてきて 就次
 10 うかふをま、のなみのみるぶさ 元吉

初折オ

11 たちつ、く岩ねの松の下涼み
 12 やすらひくらす岡越のみち
 13 乗駒もなつめはしはし引と、め
 14 青みそひたる小野の草むら
 15 度く、に雨やそ、きも朽ぬらん
 16 秋のあらしのあかつきの雲
 17 すさまじきかねに枕をそはたて、
 18 ひとりぬる夜のさむしろの月
 19 ふるさる、身のほとこそは哀なれ
 20 つかふる袖のへたてある中
 21 色く、に染分にたる華ころも
 22 あらたまりぬるけふことの春
 23 春鳥子の声珍き釣簾の外に
 24 日のさすかたや雪まそふ庭
 25 池水の末は氷にむすほ、れ
 26 枯しをま、のなみのねぬなは
 27 夏刈の芦の下葉の折ふして
 28 あつさをさそふ風かよふなり
 29 明やすき月に端ゐはた、しはし
 30 かたらひつ、もなこりある友
 31 心ならず旅に出こし京師人
 32 おもひかへすにちきりはかなき
 33 別にしあとにかなしき今朝の夢
 34 したひ佐ぬるきぬのうつり香
 35 かさしつるさくらは袖に散つくし

及佐 忠祐 元与 了佐 安松 女伸 良音 正純 純重 就次
 及佐 忠祐 元与 了佐 安松 女伸 良音 正純 純重 就次

初折ウ

36 琴の音かすむ舞のはてく
 37 永日も漸暮にける宮ところ
 38 あくこもあらずくめるさかつき
 39 老ぬれは年の終のいはひして
 40 みとりのほらに住そかへぬる
 41 小車はおもはぬかたにやりつ、け
 42 たか前わたりけはひあやしき
 43 笛竹の音もすみにたるよひく、に
 44 たちうかれつ、うたふ一ふし
 45 暮すきて木こりや道をまとふらん
 46 霧にこまれる山のはるけさ
 47 をくる、も声しつ、行天つ雁
 48 ほのかに成ていりし有明
 49 さき染ていくへかさなる花の雲
 50 いつむらさきの松か枝の藤
 51 春日埜や長閑に雨の晴けらし
 52 さと人いそくみちはるか也
 53 ましはるも朝けはかりの市の場
 54 やとりを出てなくむら鳥
 55 白妙の竹の林の月雪に
 56 戸さしもやらすとはる、をまつ
 57 かならすとちきりをきしもいかならん
 58 ことよきはた、中たちにのみ
 59 偽とおもひなからも頼きて
 60 さそはれにしはうき旅の空

女伸 安松 信良 玄仲 良音 正純 純重 忠祐 及佐 就次 了佐 信良 及佐 玄仲 良音 元与 元吉 安松

二折オ

二折ウ

61 あら浪の舟に吹そふをひて風
 忠祐
 62 みれは芦屋の瀧とをき末
 玄仲
 63 ほのかなる焼火の影か飛ほたる
 及佐
 64 くれかゝりたる竹のした道
 純重
 65 音するや田面の引板の綱手縄
 玄仲
 66 霧のしつづくの草葺の内
 正純
 67 友としもむかへは月の明はなれ
 良音
 68 声々にはた渡るあちむら
 元吉
 69 真砂ちのところ所は霜消て
 安松
 70 松の落葉そかきあつめぬる
 就次
 71 読哥の種やつきせぬ筆の跡
 忠祐
 72 神代も久しまもるすゑく
 元与
 73 雲まよりあらはれいつる淡路嶋
 信良
 74 波のうへにや残る日の影
 玄仲
 75 しはしたゝかへりもやらぬあま小舟
 浄喜
 76 しつまりにたるうら風のをと
 純重
 77 花園の花よりあくる志賀の山
 元吉
 78 寺有かたは遠くかすめり
 安松
 79 春になを常の灯かゝけそへ
 元与
 80 をこたりもなきまなひしるしも
 信良
 81 云くたすみとりの袖をくるしみて
 玄仲
 82 御前うときはうき新参
 及佐
 83 身のほと向後いかにと思わひ
 了佐
 84 おほけなきにしえにしかけをく
 良音
 85 恋せしといのる社にしめはへて
 純重

三折オ

三折ウ

86 とりくなれや神の大ぬさ
 元吉
 87 さかふるやなを類広き家としれ
 就次
 88 夏冬さそふ千尋ある陰
 玄仲
 89 むら／＼に松の生そふ小塩山
 安松
 90 いく度ならし時雨ふる空
 浄喜
 91 一かたは月の影よりしらむ夜に
 及佐
 92 秋の雲引のこす海つら
 正純
 93 漸さむき嵐やなみにすさふらん
 了佐
 94 かめめのこゑのしつかなるくれ
 元吉
 95 かすかにも日はうつりぬる芦垣に
 安松
 96 かけほしわふるあさのさ衣
 元与
 97 五月雨は晴まもあらずつゝくらし
 正純
 98 草たかく成玉ほこの末
 及佐
 99 いにしへの跡には花をあるしにて
 玄仲
 100 おもひのへつゝかすみをそ酌
 忠祐
 就隆 一 元吉 八
 浄喜 七 及佐 八
 玄仲 十三 忠祐 六
 安松 九 元与 七
 正純 八 了佐 五
 良音 七 源音 一
 純重 七
 信良 六
 就次 七

名残折オ

名残折ウ

〔付記〕資料の閲覧・翻刻・写真掲載の御許可を賜りました所蔵機関、書誌調査のご協力を賜りました高尾祐太氏に篤く御礼申し上げます。

本稿は JSPS 科研費 (JP20110292) 研究代表 川上一) 及び慶應義塾大学附属研究所斯道文庫基金 (研究代表 川崎美穂) による成果の一部である。

(かわさき・みおん)

(かわかみ・はじめ)